

を二種類に分類した。第一は効用を最大化する選択肢を選ぶことを目的とする追求者 (maximizer)<sup>3</sup>, 第二は満足化基準を満たす選択肢を選ぶことを目的とする満足者 (satisficer)<sup>4</sup>である。追求者は最良の結果を手に入れることを、満足者は程々に満足できる結果を手に入れることを目的とした意思決定を行う (Schwartz, 2004 千葉・編集部訳 2004)。

Schwartz et al. (2002) によると、追求者は効用を最大化する意思決定を行うためあらゆる選択肢の情報を集めようとする。しかし人間の処理能力には限界があるため、選択肢数が増加するほど最大化に要するコストが増加し最終的な効用が低下する。追求者は実際に入手した結果と今回入手しなかった結果を比較して、後者に対する後悔を増大させる。他方満足者は限定された能力や時間の中で最低限の基準を満たすことを目的とするため、最初に満足化基準を満たした選択肢を選択する。満足者は追求者と異なり、全ての選択肢を精査することを好まない。従って満足者は追求者に比べて、今回入手しなかった結果に対する後悔が少ない。実際に Schwartz et al. (2002) の作成した“後悔・追求者尺度”では、“後悔尺度 (Regret Scale)”と“追求者尺度 (Maximization Scale)”に正の相関が認められた。

Schwartz et al. (2002) は自ら作成した尺度と多数の尺度との相関を求めた。その結果第一に、追求者と抑うつ、完璧主義には正の相関が、幸福感、楽観主義、生活への満足感、自尊心には負の相関があることが見出された。第二に、追求者は満足者と比べて商品購入後の満足度が低いことが示された。第三に、追求者は自分の選んだ選択肢と他人の選んだ選択肢を比較することが明らかになった。第四に、追求者は満足感情よりも後悔感情を示しやすいことが認められた。

Schwartz et al. (2002) の作成した尺度では、アメリカやカナダに在住者を調査対象としており日本人における知見は必ずしも見出されていない。そこでまず研究 1 では、Schwartz et al. (2002) が作成した“後悔・追求者尺度”を日本語に翻訳して調査を実施し検討を行う。次に研究 2 では、この分析結果に基づいて日本人にも適用可能な意思決定スタイルを測定する尺度を作成し内容を吟味する。

<sup>3</sup> 意思決定の分野では、maximization は“最大化”と訳されている。従って maximizer は“最大者”とするのが妥当だが、意思決定の分野外においても理解可能なように Schwartz (2004 千葉・編集部訳 2004) を引用して“追求者”と翻訳した。“追求”とは広辞苑 (新村, 1998) によると“どこまでも後を追いかけて求めること”であり、大辞林 (松村, 1995) によると“目的とするものをねばり強く追い求めること”である。Schwartz et al. (2004) が定義する maximizer も意思決定において絶えず最高の選択肢を追い求める人を示すことから、“追求者”と翻訳しても意味から逸脱しないと思われた。

<sup>4</sup> 満足者 (satisficer) は Simon (1955) の造語である。

## 研究 1

### 目的

研究 1 では、Schwartz et al. (2002) によって作成された“後悔・追求者尺度”を翻訳し、日本人に回答を求めることによって“後悔・追求者尺度”の検討を行う。

### 方法

**調査参加者と手続き** 調査参加者は学生計 307 名 (男性 107 名, 女性 198 名, 不明 2 名, 平均 23.93 歳, *SD* 7.43 歳, range 18-59 歳) であった。調査は 2004 年 10 月から 2005 年 6 月に、大学の講義時間の一部を用いて集団実施された。

**質問項目** Schwartz et al. (2002) によって作成された“後悔・追求者尺度”を日本語に翻訳して使用した。翻訳された尺度は“後悔尺度”5 項目、“追求者尺度”13 項目の計 18 項目から構成される (Table 1)。各質問項目に対して、“全くそう思わない: 1”から“非常にそう思う: 7”の 7 件法で回答を求めた。

### 結果と考察

**因子構造の検討** Schwartz et al. (2002) によって抽出された因子数をもとに、質問項目への回答に対して 4 因子解の因子分析 (主成分分解, パリマックス法) を行った。その結果、第 1 因子から“後悔”、“優柔不断”、“追求者”、“チャンネル探索”と解釈された。“後悔”は、“何かを選ぶ時はいつでも、もし違うものを選んだら、違う結果になったのではないかと、思ってしまう”など 4 項目から、“優柔不断”は“友達へのプレゼントを選ぶのによく苦勞する”など 4 項目から、“追求者”は“今の仕事に満足していても、もっといい機会があるのではないかとと思うのは当然だ”など 7 項目から、“チャンネル探索”は“テレビを見ている時、その番組を見続けるつもりでも、もっといい番組がないか、よくチャンネルを回してチェックする”など 2 項目から構成された。1 項目 (“一番の映画、一番の歌手、一番の俳優、一番の小説など、何でもランク付けするのが大好きだ”) は、いずれの因子にも高い負荷を示さなかった。

**信頼性の検討** 各因子の  $\alpha$  係数は、“後悔”が .84, “優柔不断”が .72, “追求者”が .61, “チャンネル探索”が .76 であった。従ってこれらの因子は概ね高い信頼性及び内的一貫性を持っていると判断された。

**因子の検討** ただし本結果において抽出された 4 因子解は、Schwartz et al. (2002) が想定した 4 因子解と項目の構成が異なった。第一に、Schwartz et al. (2002) が後悔に関する因子 (F1) とした項目 (“何かを選ぶ時はいつでも、もし違うものを選んだら、どう

Table 1  
Schwartz et al. (2002) における“後悔・追求者尺度”の因子分析結果(主成分分解, バリマックス法)

因子1: 後悔( $\alpha=.84$ )					
何かを選ぶ時はいつでも、もし違うものを選んだら、違う結果になったのではないか、と思ってしまう <sup>a)</sup>	.837	.197	.223	.048	
商品を選んでそれが良かったとしても、他の選択肢を選んだらもっと良い結果が得られていたかもしれない、という気持ちに襲われる <sup>a)</sup>	.759	.228	.201	.198	
人生のことを考える時、しばしば、過ぎてしまったチャンスにどれくらいの価値があったか考えてしまう <sup>a)</sup>	.752	.096	.247	.197	
一度決心したら振り返ることはない <sup>a)</sup>	-.725	-.161	.257	-.131	
因子2: 優柔不断( $\alpha=.72$ )					
友達へのプレゼントを選ぶのによく苦労する <sup>a)</sup>	.090	.732	.104	-.030	
ビデオをレンタルする時はいつも、一番いいものを選びたいと思っても苦労する <sup>a)</sup>	.110	.699	.105	.230	
買いたいものをしていて、本当に好きな服を選ぶとなると時間がかかる <sup>b)</sup>	.113	.691	.182	.212	
例えば友達への手紙であっても、文章を書くのはとても苦労する。ぴったりと合う言葉を見つけるために、簡単な文でも何度も下書きをする <sup>a)</sup>	.361	.620	.087	-.095	
因子3: 追求者( $\alpha=.61$ )					
今の仕事に満足していても、もっといい機会があるのではないかと思うのは当然だ <sup>b)</sup>	.126	-.070	.683	.093	
選択をする時はいつでも、例えば今、目の前にない選択肢であろうとも、全ての可能性を考えてみる <sup>a)</sup>	.267	.238	.584	.005	
何かを選ぶ時はいつでも、もし違うものを選んだら、どうなる結果になるかという情報を集めようとする <sup>a)</sup>	.484	-.027	.525	-.080	
自分のすることには何でも、最高の基準値がある <sup>d)</sup>	.053	.311	.446	.085	
自分にぴったりの結婚相手が見つかるまで、どのような恋人がいいか、服のように色々試してみたい <sup>b)</sup>	-.091	.093	.445	.141	
商品を選ぶ時、二番目に気に入ったもので満足したことはない <sup>d)</sup>	.041	.248	.410	-.141	
時々、今の生活とは全く違う生き方をしている自分を想像する <sup>b)</sup>	.205	.037	.406	.065	
因子4: チャンネル探索( $\alpha=.76$ )					
テレビを見ている時、その番組を見続けるつもりでも、もっといい番組がないか、よくチャンネルを回してチェックする <sup>b)</sup>	.223	.070	.112	.831	
カーラジオを聞いている時、その番組に満足していても、もっといい番組が流れていないか、他のチャンネルをよくチェックする <sup>b)</sup>	.172	.096	.067	.815	
いずれの因子にも高い負荷を示さなかった項目					
一番の映画、一番の歌手、一番の俳優、一番の小説など、何でもランク付けするのが大好きだ <sup>b)</sup>	-.072	.154	.377	.304	
因子負荷量の二乗和		2.99	2.28	2.25	1.72
寄与率(%)		16.6	12.7	12.5	9.50
累計寄与率(%)		16.6	29.3	41.8	51.4

<sup>a)</sup>後悔に関する因子(F1), <sup>b)</sup>最良のものを探索することに関する因子(F2), <sup>c)</sup>購買行動に関する因子(F3), <sup>d)</sup>高い基準を設定することに関する因子(F4) (Schwartz et al., (2002))

<sup>e)</sup>逆転項目

いう結果になるかという情報を集めようとする”)は、本研究では“追求者”になった。第二に、この“追求者”の中には Schwartz et al. (2002) が最良のものを探索することに関する因子(F2)とした三つの項目(“今の仕事に満足していても、もっといい機会があるのではないかと思うのは当然だ”など)及び、高い基準を設定することに関する因子(F4)とした三つの項目(“選択をする時はいつでも、例えば今、目の前にな

い選択肢であろうとも、全ての可能性を考えてみる”など)が含まれていた。第三に、1項目(“一番の映画、一番の歌手、一番の俳優、一番の小説など、何でもランク付けするのが大好きだ”)はいずれの因子にも高い負荷を示さなかった。

このように“後悔・追求者尺度”を日本で実施した結果、質問項目は Schwartz et al. (2002) が想定したように分離されなかった。従って“後悔・追求者尺

度”を日本で適用するには、因子構造が異なるために適切に測定することが困難になる可能性がある。

このような結果になった原因として第一に、本尺度の中にはカーラジオに対する態度を聞く項目があるが日本は車社会のアメリカと異なりカーラジオを頻りに利用する人は限定されていると推定される。第二に、追求者及び満足者という概念は幅広い状況を仮定しているにも関わらず本尺度上では“カーラジオを聞いている時”など限定された状況下での意思決定を仮定していた。

以上の点を踏まえ研究 2 では、Schwartz et al. (2002) の“後悔・追求者尺度”をもとに日本人の生活様式に合致した質問項目を新たに作成する。また、質問項目をより抽象化して幅広い状況下での意思決定傾向を測定する尺度を作成する。

## 研究 2

### 目的

研究 2 では、日本人の生活様式に合致し幅広い状況下での意思決定を測定する質問項目を作成し検討を行う。

### 方法

**調査参加者と手続き** 調査参加者は学生計 163 名 (男性 58 名, 女性 104 名, 不明 1 名。平均 20.99 歳, SD 2.30 歳, range 19-47 歳) であった。調査は 2004 年 12 月に、大学の講義時間の一部を用いて集団実施された。

**質問項目の作成** Schwartz et al. (2002) の質問項目における文言をもとにして、“追求者”と“後悔”の概念に対応する 36 項目を独自に作成した。質問項目は、一般的な日本人の生活様式に合致させること、幅広い状況下での意思決定を仮定することを重視した。各質問項目に対して、“全くそう思わない:1”から“確かにそう思う:5”の 5 件法で回答を求めた。

### 結果と考察

**因子構造の検討** Schwartz et al. (2002) によって抽出された因子数をもとに質問項目への回答に対して 4 因子解の因子分析 (主成分分解, パリマックス法) を行った。その結果, 第 1 因子及び第 2 因子は後悔に関する因子と解釈され, 第 3 因子と第 4 因子は追求に関する因子と解釈された (Table 2)。

そこで次に、質問項目への回答に対して 2 因子解の因子分析 (主成分分解, パリマックス法) を行い、後悔と追求に関する因子に分離されるか検討した。その結果, 4 因子解の因子分析において後悔と解釈された 15 項目のうち 13 項目は第 1 因子に、追求と解釈された 17 項目のうち 14 項目は第 2 因子に分離された。

各因子に含まれる質問項目を検討したところ, 第 1 因子に負荷が高い項目は“過ぎてしまった事に対して, ‘こうすれば良かった’ などと考える事がよくある”など 14 項目, 第 2 因子に負荷が高い項目は“新しい商品, 流行の健康法など, つねに情報収集は欠かせない”など 14 項目であった。従って Schwartz et al. (2002) と同様に, 第 1 因子は“後悔”, 第 2 因子は“追求者”と解釈された。

次に理論的整合性及び因子負荷量の高さを考慮して各因子から 8 項目を選出した。これらの因子構造を検討するため再度因子分析 (主成分分解, パリマックス法) を行った結果, 第 1 因子に負荷が高い項目は“何かを購入した後に, 違うものにしていれば良かったという事がよくある”など 8 項目, 第 2 因子に負荷が高い項目は“可能性がある限り, 物事を追求する事に苦労は惜しまない”など 8 項目であった。これらの質問項目は前述の因子分析の結果と同様の因子に分類され, 第 1 因子は“後悔”, 第 2 因子は“追求者”と解釈された。作成された尺度は“日本版後悔・追求者尺度”と命名された。

**信頼性の検討** 各因子の  $\alpha$  係数は, “後悔”が .85, “追求者”が .74 であった。従ってこれらの因子は概ね高い信頼性及び内的一貫性を持っていると判断された (Table 3)。

**因子の検討** 因子間の関係性を検討するため“後悔尺度”と“追求者尺度”の尺度得点の相関係数を求めた。その結果, 両尺度には弱い有意な正の相関が見られた ( $r = .20, p < .05$ )。従って追求者傾向が強いほど後悔傾向があった。これは Schwartz et al. (2002) の理論と一致する。

### 総合考察

研究 1 では, Schwartz et al. (2002) によって作成された“後悔・追求者尺度”を翻訳して日本人に実施した結果, Schwartz et al. (2002) が想定したように項目が分離されなかった。そこで研究 2 では“後悔・追求者尺度”をもとに、日本人の生活様式に合致し幅広い状況下での意思決定を想定した新たな尺度を作成した。因子分析の結果, “後悔”, “追求者”の 2 因子が抽出された。両因子の信頼性は高く, また下位項目の尺度得点に弱い正の相関があった。従って日本人においても, 追求者は後悔傾向が見られると解釈される。

今後の課題としては, 本尺度と Schwartz et al. (2002) によって作成された尺度間の関連性を示す定量的根拠が望まれる。そのために, 両尺度を同一調査参加者に反復して実施するなど, 知見の獲得が必要とされる。

Table 2  
著者らが作成した36項目、及び4因子解の因子分析結果(主成分分解、バリマックス法)

因子1:後悔1				
何かを購入した後に、違うものにしていれば良かったという事がよくある <sup>a)</sup>	.831	.126	.070	.014
選ぶのに苦労した商品でも、買った後に後悔する事が多い <sup>a)</sup>	.766	.146	.132	-.079
購入した商品が良かったとしても、“もっと良いものもあつたらうに”と思ってしまうことが多い <sup>a)</sup>	.689	.253	.180	-.040
ある商品を購入した際、より良い商品があつた可能性を考えて後悔する事がある <sup>a)</sup>	.650	.183	-.061	.089
過ぎてしまった事に対して、“こうすれば良かった”などと考える事がよくある <sup>a)</sup>	.602	.404	.047	-.123
人生において、“あの時こうしておけば良かった”と強く思うことが多い <sup>a)</sup>	.601	.208	.276	-.172
テレビやラジオのチャンネルを頻繁に回して、もっと楽しい番組を捜そうとする	.417	-.121	-.178	.151
因子2:後悔2				
くよくよ過去の事を悔やむ方だ <sup>a)</sup>	.384	.676	-.022	-.060
持ち物、生活、境遇など、他人と比較してしまう <sup>a)</sup>	.225	.607	.283	.025
自分は他人より心配性だと思う <sup>a)</sup>	.300	.555	.111	.252
自分は優柔不断だと思う <sup>a)</sup>	.289	.497	.164	.007
何かを選ぶ事に時間をかけすぎて、結局どうでもよくなってしまふことがある <sup>a)</sup>	.185	.481	.010	.057
地震、病気、テロなどの話を聞くと、とても不安になる	-.025	.462	.094	.086
一度決心したら、二度と振り返らない <sup>a)</sup>	-.170	-.449	.018	.417
何千分の一の確率でも、自分が最もおそれている出来事が起こる事に対して、不安を抱いている <sup>a)</sup>	.319	.422	.240	.254
因子3:追求1				
どんな趣味でも、きわめてみたくなり、没頭するタイプである <sup>b)</sup>	.015	-.086	.732	.187
お気に入りのもの、タレント、歌手などはとことん追求する <sup>b)</sup>	-.064	.116	.714	.118
お気に入りのものは全て集めてみたくなる <sup>b)</sup>	.117	.158	.643	.058
自分は情報通だと思ふ <sup>b)</sup>	.092	.240	.538	.189
自分は他人より良い商品を選択する自信がある <sup>b)</sup>	.041	-.159	.513	.415
新しい商品、流行の健康法など、つねに情報収集は欠かさない <sup>b)</sup>	.094	.142	.484	.391
自分が購入したものより、他人が良いものを持っているら、何だか悔しい <sup>a)</sup>	.117	.375	.470	.005
現状に満足したことはない	.390	-.086	.427	.025
他人が良いものを持っている時は、どこでいくらで買ったのか知りたくてしょうがなくなる	-.005	.381	.404	.008
因子4:追求2				
一つのものを買うにも、他店と比べてみる事が多い <sup>b)</sup>	-.024	.277	.089	.659
何かの決断をする時は、ありとあらゆる選択肢を考えてみる <sup>b)</sup>	.280	-.013	.041	.632
商品を選ぶ時は、つねに最良のものを選ぶようにしている <sup>b)</sup>	-.100	-.080	.267	.543
可能性がある限り、物事を追求する事に苦労は惜しまない <sup>b)</sup>	.376	-.270	.235	.512
一つのものを買うにも、数種類のブランドを比べる事がよくある <sup>b)</sup>	-.216	.413	.123	.476
一つのものを買うにも、数日間考え込む事がある <sup>b)</sup>	.081	.329	.138	.458
買い物の時間や、商品を選ぶ時間が他人より長いと思ふ <sup>b)</sup>	-.003	.350	.248	.446
購入する際は、外袋の表示をよく見ながら決める <sup>b)</sup>	.090	.206	.099	.446
いずれの因子にも高い負荷を示さなかった項目				
世間で良いと評判の商品でも、自分にとってあまり良くならなかったら、絶対に買わない	-.043	-.128	.016	.376
今よりもっとすばらしい人生を送るために、日々努力している	.235	-.367	.167	.349
何かを決断する際、ある程度の妥協は仕方ないと思ふ	-.148	.392	-.293	-.217
計画を立てるのは大嫌いだ	.125	-.002	-.015	-.400
因子負荷量の二乗和	4.20	3.91	3.52	3.51
寄与率(%)	11.7	10.9	9.8	9.7
累計寄与率(%)	11.7	22.5	32.3	42.0

<sup>a)</sup> 2因子解の因子分析における“後悔”因子<sup>b)</sup> 2因子解の因子分析における“追求者”因子

Table 3

著者らが作成した“日本版後悔・追求者尺度”の因子分析結果(主成分分解, バリマックス法)

因子1: 後悔( $\alpha=.85$ )		
何かを購入した後に、違うものにしていれば良かったという事がよくある	.807	.100
選ぶのに苦労した商品でも、買った後に後悔する事が多い	.781	.084
過ぎてしまった事に対して、“こうすれば良かった”など考える事がよくある	.739	-.047
購入した商品が良かったとしても、“もっと良いものもあったらうに”と思ってしまうことが多い	.734	.118
人生において、“あの時こうしておけば良かった”と強く思うことが多い	.695	.088
ある商品を購入した際、より良い商品があった可能性を考えて後悔する事がある	.665	.056
くよくよ過去の事を悔やむ方だ	.653	-.019
自分は優柔不断だと思う	.502	.194
因子2: 追求者( $\alpha=.74$ )		
可能性がある限り、物事を追求する事に苦労は惜しまない	.158	.541
何かの決断をする時は、ありとあらゆる選択肢を考えてみる	.141	.550
買い物の時間や、商品を選ぶ時間が他人より長いと思う	.135	.614
新しい商品、流行の健康法など、つねに情報収集は欠かさない	.100	.650
お気に入りのもの、タレント、歌手などはとことん追求する	.062	.530
一つのものを買うにも、他店と比べてみる事が多い	.021	.598
どんな趣味でも、きわめてみたくなり、没頭するタイプである	.010	.652
商品を選ぶ時は、つねに最良のものを選ぶようにしている	-.174	.626
因子負荷量の二乗和	4.06	2.93
寄与率(%)	25.4	18.3
累計寄与率(%)	25.4	43.7

## 引用文献

- Allais, M. (1953). Le comportement de l'homme rationnel devant le risque: Critique des postulats et axiomes de l'école américaine. *Econometrica*, **21**, 503-546.
- Bell, D. E. (1982). Regret in decision making under uncertainty. *Operations Research*, **30**, 961-981.
- Kahneman, D. (2003). Maps of bounded rationality: Psychology for behavioral economics. *American Economic Review*, **93**, 1449-1475.
- Loomes, G., & Sugden, R. (1982). Regret theory: An alternative theory of rational choice under uncertainty. *Economic Journal*, **92**, 805-824.
- 松村 明(編)(1995). 大辞林 第二版 三省堂 (Matsumura, A.)
- von Neumann, J., & Morgenstern, O. (1947). *Theory of games and economic behavior*. 2nd ed. NJ: Princeton University Press.
- 新村 出(編)(1998). 広辞苑 第五版 岩波書店 (Niimura, I.)
- Savage, L. J. (1951). The theory of statistical decision. *Journal of American Statistical Association*, **46**, 55-67.

- Schwartz, B. (2004). The tyranny of choice. *Scientific American*, **290**, 70-75.  
(シュワルツ, B. 千葉啓恵・編集部(訳)(2004). 豊かさが招く不幸 日経サイエンス, 7月号, 56-63.)
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D. (2002). Maximizing versus satisficing: Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 1178-1197.
- Simon, H. A. (1955). Behavioral model of rational choice. *Quarterly Journal of Economics*, **69**, 99-118.
- 竹村和久(2005). 意思決定現象と行動意思決定論 知能と情報(日本知能情報フuzzy学会誌), **17**, 644-654.  
(Takemura, K. (2005). Decision making and behavioral decision theory. *Journal of Japan Society for Fuzzy Theory and Intelligent Informatics*, **17**, 644-654.)
- 竹村和久(2006). リスク社会における判断と意思決定 認知科学, **13**, 17-31.  
(Takemura, K. (2006). Judgment and decision making in risk society. *Cognitive Studies*, **13**, 17-31.)

—2007. 1. 22 受稿, 2008. 5. 10 受理—